編集後記

『眞實心』第三十四集をお届けします。本集には、平成二十四年度に行われました宗教講座の五編がおさめられています。皆さんは本学で仏教について学ばれました。また、新入生対象の学長講話をはじめとして、年間五回にわたる宗教講座に参加される機会がありました。多忙な学生生活の中で、精神的なゆとりの時間としてこの宗教講座において様々なお話を聞く機会がありましたが、自己の生き方を見直す糸口が見つかりましたでしょうか。

多種多様な分野でご活躍されている諸先生のお話には、私たちの生き方を考える際の道標となる貴重な内容に満ちています。

「ひとたび死なば　みな『ほとけ』――日本人の死生観を考える――」は、「ほとけ」という語の意味が歴史の流れの中でどのような変容を遂げてきたのかという視点から考察され、現代日本人が普段あまり意識することが無い「死」とどう向き合えば良い

かを教示していただきました。「阿弥陀さまの世界、死んだらほとけという世界」があればこそ、如何なる状況下にも「生き抜く」ことも「死に逝く」ことも素直に受容できる境地に到達できるという死生観を学びました。

「はじめての仏教説話」では、仏教説話は仏教の究極の教え「良いことをしましょう、悪いことはしちゃいけません」ということを民衆に悟らせるための話であること、そのために人々に身近な例え話を題材として語られた布教活動であったことを知りました。

「よき人に出会って」の中では、人間が本当の自分に出会うためには「よき人との出会い」――本当に自分を叱り、心から声をかけてくれる友を持つこと――が重要だということが指摘されました。講師ご自身の自己形成史を話される中で、人生の師となる人や書物などとの出会いが、自己形成をする上でどんなに重要であるかを教えて下さいました。

「京都の祭りと民間信仰――暮らしの中の祈り――」で語られたことは、京都という土地に根差した祭りや民間信仰は、京都の人々の悩みや苦しみを解決しようという祈

りから生まれたものであるということです。過去の人々が悩み苦しんだ問題の解決策として祭りや民間行事が生み出され、伝えられてきたということ、そしてそれらの祭りや民間行事を実際に味わい、「幸せになりたい」という古今共通の思いを体験して、京都での学生生活を充実させるための方途を提案されました。

「平塚らいてうの思想と実践」は、平塚らいてうがどのように旧弊な社会体制や価値観と戦い、自尊自立した個として成長していったのかが語られました。彼女の戦前・戦後にわたる諸活動は、一個の自立した人格への成長史であり、社会変革運動でもありました。彼女の何にも動じぬ歩みを支えたのは、禅修行による見性の体験でした。人間は己の真の姿を知ることにより、何にもたじろがず、自分の信念に従って生きることが可能になるのだということを平塚らいてうから教えられました。

さて、皆さんは本学を旅立ち、これから一人の社会人として生きていかれます。苦しいことや辛いことに遭遇することでしょう。その際、周りの人々の声に謙虚に耳を傾け、己を大切にしつつ、自分の信じる道を歩んでください。お釈迦様がおっしゃった通り、この世は四苦八苦に満ちています。しかし、一つひとつの事柄に心を込めて

取り組んでいけば、あなたを見守る暖かな眼差しをきっといつか感じられるでしょう。本学で学ばれた仏教や宗教講座で学んだことが、あなたを支える日のあることを願っています。

最後になりましたが、ご講話をお願いいたしました先生方には、ご多用中にも関わりませず、原稿にお目通しいただきましたことを厚く御礼申し上げます。

なお、本文の文責はひとえに編集委員にございます。

（編集委員会）